

4

いくつもの 加美町の未来像

ここからは、加美町の景観資源や住民のみなさんの意見をもとにつくられた『加美町協働の景観まちづくりプラン』の内容を見てみましょう。

まちづくりを進めていく枠組み



『加美町協働の景観まちづくりプラン』とは？

「加美町協働の景観まちづくりプラン」とは、住民のみなさんや行政などで考えを共有して、協働によって加美町らしい景観を守り育てる活動に取り組んでいくために、加美町が目指す景観まちづくりの方向性や、その目指すべき姿に向けての取り組みなどをまとめたものです。

「加美町協働の景観まちづくりプラン」の内容

- 加美町を知る
加美町の景観資源や課題などを示します。
- 加美町の未来を描こう
住民のみなさんにご協力いただいた、資源調査やワークショップの結果をもとに作成した「景観まちづくりの基本理念」と「4つの目標と地域ごとの方針」、「取り組みのシナリオ」を示します。
- シナリオの実現に向けて
協働による景観まちづくりをどのように実現していくのか、今後の進め方などについて示します。

※「加美町協働の景観まちづくりプラン」は加美町公式ホームページからご覧になれます。

次のページから、「加美町協働の景観まちづくりプラン」で掲げている目標や具体的なシナリオを紹介していきます。

まちづくりの基本理念

「加美町協働の景観まちづくりプラン」では、なりわいや暮らしといった地域の営みを感じることができ、自然と共生する加美町らしい景観を守り育て未来に引き継いでいくために、基本理念を以下のように定めています。

景観まちづくりの基本理念

自然と共生し、人々のなりわいと暮らしが見える加美町らしい景観

「加美町らしい景観」とは？

加美町の現在の景観は、先人たちが続けてきたなりわいや暮らしといった営みによってつくられているものです。また、ブナなど豊かな森林をもつ船形山や鳴瀬川、田川といった河川、その流域に広がる田園地帯など豊かな自然資源は、先人たちが守り育ててきた住民共有の財産と言えるでしょう。

このように豊かな自然に恵まれた加美町において、特徴のある風景として親しまれているのが、加美富士と呼ばれる「葉菜山」です。葉菜山は加美町のシンボルとして多くの住民に親しまれています。その姿は町内のいたる場所から見ることができ、場所や季節によってその表情を変え、この葉菜山を背景として先人たちの営みは続いてきました。例えば、特徴的なまちなみを残している各地域の商店街では、いずれも葉菜山が自然のランドマークとしてその商店街の加美町における位置関係を教えてくれます。また、加美町に広がる田園風景は、農業を絶やさずに続けることで守られている風景であり、そうした田園風景も葉菜山と関係することで「他にはない特徴的な風景」として感じることができます。

このことから、町では「町内の各地域において、その地域らしい生活の営みが色濃くにじみ出た風景に、季節や場所によって顔が変わる葉菜山を背景とした景観」を「加美町らしい景観」として位置づけています。

加美町の未来をつくる22のアイデア

地域の営みに関する「なりわい」「暮らし」「自然」「担い手」の4グループごとに目標があります。また、4つのグループには、地域の課題解決や地域をよりよくするために、住民のみなさんのアイデアが形になった22のシナリオがあります。

各地域の方針

中新田 観光・交流を通じたにぎわいの創出
小野田 地域で学び、伝え合う環境の促進
宮崎 農業を中心とした新しい価値の創造

なりわい

目標1

町内の魅力を発信
 していけるまち

自然

目標3

自然の中で遊びを
 教え合うまち

中新田	地域資源を活かしたにぎわいの景観	シナリオ 01
	観光の拠点づくり	シナリオ 02
	まちなりわい発信局	シナリオ 03
小野田	加工体験を通じた食育のすすめ	シナリオ 04
	里山暮らしPR委員会	シナリオ 05
宮崎	市民農園による宮崎のファンづくり	シナリオ 06

中新田	自然とのふれあいづくり	シナリオ 16
小野田	日曜しぜん探検隊	シナリオ 17
宮崎	四季を体験する自然学校	シナリオ 18

各地域の方針

中新田 自然の中で学べる環境の促進
小野田 自然の中の遊びや知恵を伝え合う環境の促進
宮崎 子どもを中心とした自然体験の促進

次のページ以降では、22のシナリオに取り組んだことで様々なまちの課題が解決されたときの姿を、イメージとして紹介しています。この絵の中では、特定のお店や地名は出てきません。みなさんに、自分の身の回りでもできそうな、あそこでもできるのではないかと、いった想像をしていただければと思います。そういった意味で、この絵が表すのは「どこでもない」のですが、想像力によってどこでもあるものになるのです。

各地域の方針

中新田 文化・娯楽を通じた交流の促進
小野田 多世代が集う場を通じた交流の促進
宮崎 趣味の活動を通じた交流の促進

暮らし

目標 2

多世代交流に支えられ
住み続けられるまち

担い手

目標 4

新たな活力を
発揮するまち

各地域の方針

中新田 学生を中心にした地域の情報発信
小野田 町の魅力が循環する仕組みの創出
宮崎 町外の人々との体験交流の促進

シナリオ 07 外出を促す休憩処づくり

シナリオ 08 蔵を拠点とした食文化の伝承

シナリオ 09 まちの名人発掘

シナリオ 10 多世代が集う伝承の場づくり

シナリオ 11 ペットとともに訪れるまちへ

シナリオ 12 地域を巡るにぎわいづくり

シナリオ 13 宮崎文化祭

シナリオ 14 空き家を活用した芸術家の拠点づくり

シナリオ 15 子育て世代の環境づくり

中新田

小野田

宮崎

シナリオ 19 高校生が集うお店づくり

シナリオ 20 学生発のユニークな PR 活動

シナリオ 21 人や資源が循環する「贈り物トラック」

シナリオ 22 学生を呼び込む田舎暮らし体験

中新田

小野田

宮崎

4-1 新しいまちの魅力を創造・発信する場

シナリオ 19 高校生が集うお店づくり

若者が集える拠点を商店街に整備していくことで、若者の姿がまちに見えるようになるとともに、商店街がにぎわう景観が期待できます。また、若者たちが集うことで、地域を盛り上げる若者ならではのイベントが企画されることなども期待できます。

シナリオ 08 蔵を拠点とした食文化の伝承

利用されていない蔵や倉庫などを再利用することで、特徴的な商店街の景観ができます。食事や加工食品の販売をすることで、地域の人と観光客でにぎわいのある景観が復活します。カレーまつりでは、子どもから高齢者までがカレーに舌鼓を打つ景観が期待できます。

シナリオ 11 ペットとともに訪れるまちへ

これまでは外でしかペットを見ることができなかった観光地や商店街で、ペットを店舗に連れ込むことができることによって、ペットとともに食事などを楽しんでいる人の景観が生まれます。

シナリオ 21 人や資源が循環する「贈り物トラック」

旬の農産物や加工品といった地場産品をトラックで販売することで、トラックを中心として人と人が交流する景観が生まれます。また、農産物の生産が促進されることで、農地が活用され放棄地のない豊かな田園風景が期待できます。

シナリオ

13

宮崎文化祭

これまで人前で自分の趣味や特技を披露してこなかった住民が、講座や発表会を通じて披露することで、人に伝えられ共有できた満足と喜びの笑顔と参加者との交流のある景観が生まれます。また、文化祭では地域の人や自然などの良さを改めて実感している人々の景観が期待できます。

シナリオ

02

観光の拠点づくり

使われていない建物や土地が再利用されることで、生まれ変わった商店街の景観となります。そして、観光拠点で食事やお土産の販売がされることで、地域の人と観光客でにぎわいのある景観が復活します。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ3 加美町の未来
を想像しよう4 加美町の未来像
いくつもの5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ

01

地域資源を活かしたにぎわいの景観

「まちあるき」をすることで、商店街を歩く人々ににぎわいのある景観が復活します。また、ユニークな看板が立ち並ぶことで、特徴的な街並みとなり、ランドマークも整備されれば更に人々の印象に残る景観が期待されます。

シナリオ

07

外出を促す休憩処づくり

病院や店舗、公共施設など用事のあるところにしか外出しなかった高齢者が休憩処に集い、お茶や話を楽しむことで、高齢者の笑顔あふれる景観や、イベントなどで子どもとの世代間交流のある景観が生まれます。

4-2 薬菜山を背景に住民の生活を豊かにする交流の場

シナリオ
10

多世代が集う伝承の場づくり

各行政区の集会所は、地域のことについて話し合う場として主に使用されてきましたが、気軽に利用できることによって、地域の人たちがお茶や話で楽しんでいるにぎやかな景観が生まれます。また、イベントでは地域の子どもたちと高齢者の世代間交流のある景観が期待できます。

シナリオ
15

子育て世代の環境づくり

家庭で子育てをしていた親が、外で地域の郷土料理を提供することによって、食文化が継承されている景観が生まれます。また、コミュニティサロンでは、親同士や子育てベテラン世代との交流のある景観が生まれます。

シナリオ
06

市民農園による宮崎のファンづくり

農地が人に利用されなくなり荒れてしまい、営みを感じられなくなった農村景観で、再び利用されることでなりわいが見える農村景観が復活します。また、農地では地域の人と都市部の人との交流のある景観も生まれます。

シナリオ
22

学生を呼び込む田舎暮らし体験

町外の学生がまちの産業やまちづくりなどを体験しその魅力を伝え、住民がまちの魅力・価値を再認識し誇りを感じていくことで、自然や文化、なりわいなどが維持されていきます。また、学生が町外に情報を発信していくことで、まちに興味を持つ人が増え、若者が体験を通じて住民と交流する景観、まちが観光客でにぎわう景観が期待できます。

シナリオ

20

学生発のユニークなPR活動

若者ならではの方法でまちの魅力を発信していくことで、若者を中心にまちのことに関心を持つ人が増え、気になる場所やイベントなどに人が集まるようになり、まちが人でにぎわう景観が生まれます。また、町外にも発信していくことで興味を持つ人が訪れ、多くの人が交流する景観が期待できます。

シナリオ

09

まちの名人発掘

住民が自分の得意な技を小・中学校で子どもたちに伝えることで、地域の伝統的な技術に触れた子どもたちの笑顔とそれを伝えた住民の喜びに満ちた笑顔のある景観が生まれます。また、地域の伝統的な技術が若い世代に受け継がれていることを確認できる景観も生まれます。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ3 加美町の未来
を想像しよう4 加美町の未来像
いくつかのもの5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ

14

空き家を活用した芸術家の拠点づくり

農村の景観を損なう空き家に再び人が住み始めることで、暮らしの見える農村景観が復活します。また、芸術家が住み始めると、芸術家が自分の作品を展示したり、子どもたちへの指導する場が生まれ、芸術が感じられる暮らしの景観が期待されます。

4-3 自然の魅力を活用し、人と人をつなぎ合わせる場

シナリオ

16

自然とのふれあいづくり

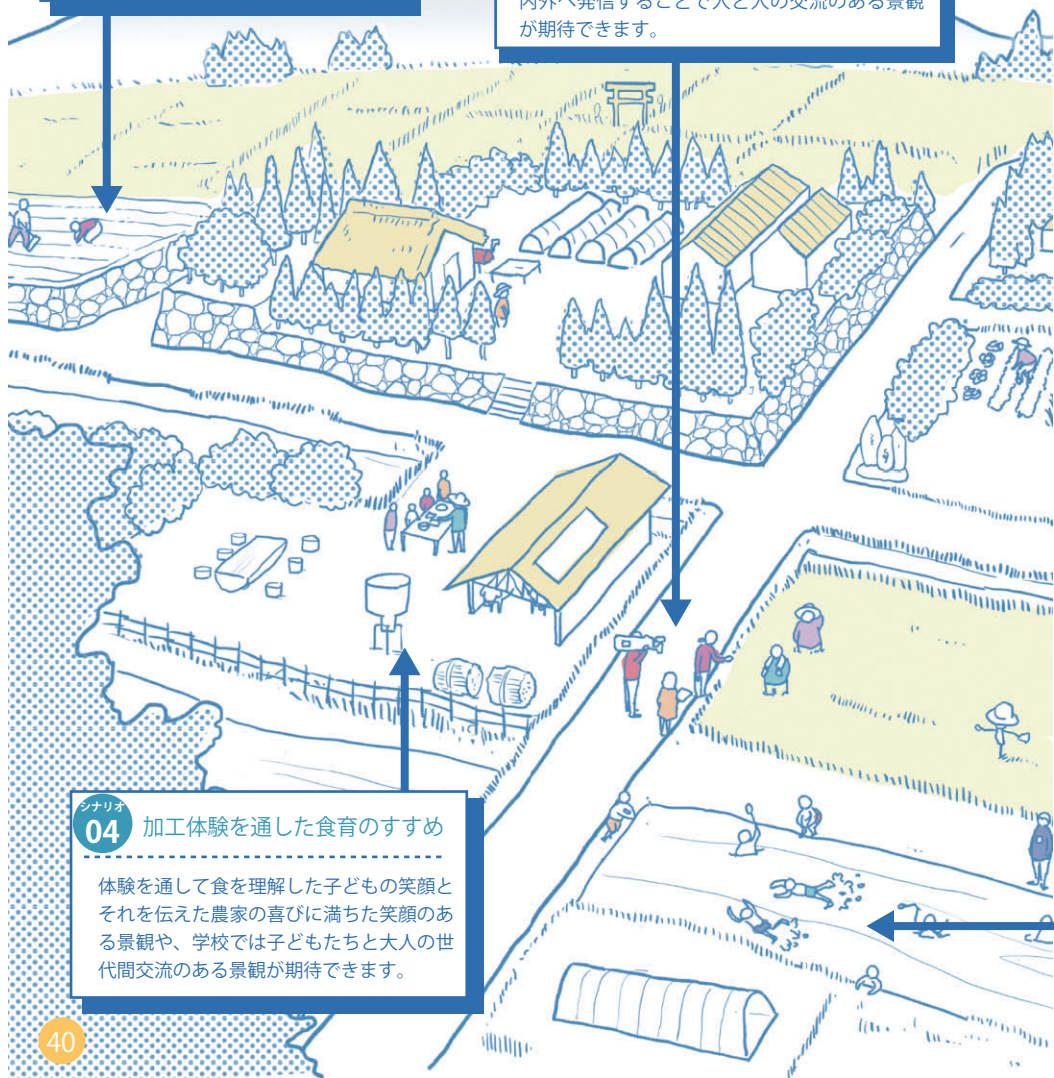
身近にある自然とふれあう環境を整備し、子どもたちにその魅力と大切さを学ぶ自然教育を実施していくことで、自然に対する理解が深まり大切にしたいという気持ちが育まれ、荒地などが美しい自然風景が守り育てられます。

シナリオ

03

まちなりわい発信局

取材活動することで、取材を受ける側は自分の仕事に誇りを、取材する側は地域の仕事を理解でき、地域を理解し合えた人々の一体感のある景観が生まれます。取材活動に若者が加わることで、更に一体感が増すとともに世代間の交流がある景観が生まれます。そして、情報を町内外へ発信することで人と人の交流のある景観が期待できます。



シナリオ

04

加工体験を通じた食育のすすめ

体験を通して食を理解した子どもの笑顔とそれを伝えた農家の喜びに満ちた笑顔のある景観や、学校では子どもたちと大人の世代間交流のある景観が期待できます。

シナリオ

05

里山暮らし PR 委員会

拠点で食の提供や体験の受け入れをすることで、地域の人とお客さんでにぎわいのある景観が生まれます。また、農村の景観を損なう空き家に再び人が住み始めることで、暮らしの見える農村景観が復活します。

シナリオ

18

四季を体験する自然学校

自然の魅力を親子で体験できるプログラムを実施していくことで、自然の中を子どもたちが笑顔で楽しむ風景が期待できます。また、観光と連携して実施し町外の参加者も増えることで、住民の自然に対する愛着が高まり豊かな自然風景が維持されていきます。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ3 加美町の未来
を想像しよう4 いくつもの
加美町の未来像5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ

12

地域を巡るにぎわいづくり

オープンガーデンなど人に見せる庭造りを行うことで、開放的で美しさのあるまちなみが生まれます。そして、人が気軽に立ち寄ることで、にぎわいと交流のある景観が生まれます。

シナリオ

17

日曜げん探検隊

自然を舞台とした昔の遊びなどを通じて、自然の中で遊ぶ知恵や楽しさを伝えていくことで、室内で遊ぶことが多かった子どもたちが、川や山など自然の中で遊ぶ風景が生まれます。

まちづくりのシナリオ集



みんなで考えた22のシナリオ

ここからは、住民のみなさんと考えた「22の取り組みのシナリオ」を紹介していきます。22のシナリオは「なりわい」「暮らし」「自然」「担い手」の4つに区分しています。その中でも、中新田・小野田・宮崎と地域ごとに分けられていますが、他地域に応用することもできます。

また、シナリオには「萌芽期(ほうがき)」「成長期」「円熟期」があり、どのような順番で取り組んでいくのかを示しています。

ここで紹介するシナリオはまちづくりの1つの見本です。このシナリオにあなたのアイデアを盛り込んでよりよいものにしていきながら、やりたいと思うこと、できることから始めてみましょう。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

なりわい

- ・ 地域資源を活かしたにぎわいの景観
- ・ 観光の拠点づくり
- ・ まちのなりわい発信局
- ・ 加工体験を通した食育のすすめ
- ・ 里山暮らしPR委員会
- ・ 市民農園による宮崎のファンづくり

1
はじめに

2
加美町の
景観の見どころ

3
加美町の未来
を想像しよう

4
加美町の未来像
いくつもの

5
取り組みを
はじめよう

6
おわりに

シナリオ
01

地域資源を活かしたにぎわいの景観



加美町の各商店街では、お客さんの減少や後継者問題が深刻化し、なりわいが安定しない現状にあります。この取り組みでは、中新田商店街を中心に、商店街の資源を活かしながら継続したにぎわいを創出し、まちの顔となるランドマークの整備を目指します。

にぎわいのきっかけづくり



萌芽期

地元住民と店主で住民組織を結成し、商店街全体を歩く「まちあるき」を企画、開催します。中新田であれば住民バスセンターなど、住民がよく集まる場所を拠点とするとよいでしょう。「まちあるき」を通じて発見した特徴的な場所などをまとめて「魅力マップ」を作ります。まちあるきを開催するたびに、魅力マップを充実させていきます。

「まちあるき」

普段から見慣れている風景でも、よく観察してみないと気づかないこともあります。また、まちの歴史やエピソードも知ることができます。他の人の視点も聞いてみましょう。まちの新しい魅力を発見できるはずです！



成長期

継続したにぎわいづくり

魅力マップに載っている場所を案内するための看板を作ります。ユニークな看板デザインコンクールを開催して、デザインを募集します。また、自転車のレンタルサービスなど、商店街を快適で自由に動き回れるようなくみを検討していきます。



円熟期

まちの顔づくり

商店街を歩く人が増えて、まちなかがにぎわってきたら、まちのランドマークの整備を検討します。建物の持ち主が「私の建物を使ってほしい」と申し出てくれることが好ましいので、積極的な情報発信が必要です。その建物が地域のコミュニティの核となるような機能について検討していきます。

「ランドマーク」

まちを特徴づけ、目印となるものです。愛着のある建物や場所はどこですか？また、そういう場所を新しくつくってもいいでしょう。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
02

観光の拠点づくり



どこの地域でも住民の活動拠点となり、まちづくりを促す地域の拠点が求められています。この取り組みでは、中新田商店街を中心に観光拠点をつくり、地域の人が食事やお土産などを提供します。

観光拠点と資源の発掘



萌芽期

「まちあるき」を通じて、まちなかで観光拠点となるような場所の候補をあげます。空き家・空き地の所有者で、活用してもいいという人の協力を得ることも考えられるでしょう。そして、拠点に求められる機能について話し合います。また、拠点で活動する人材発掘にも取り組んでいきます。

「空き家・空き地の問題」

建物が管理されずに長期間放置されてしまうと、建物の老朽化がどんどん進んでしまいます。景観としてもよくありません。他にも倒壊の危険性や放火の誘発、害獣・害虫の発生などを引き起こします。

観光プログラムの作成



成長期

拠点でふるまう地元の「食」やそれに関する「情報」、「お土産」などを考え、地域全体が関わるような観光プログラムをつくります。「火伏の虎舞」や「花楽市」などのイベントと連携すると良いでしょう。また、拠点を運営していく組織についても検討します。

観光拠点づくり



円熟期

観光プログラムを運用できる体制を整えたら、観光拠点を整備します。また、拠点が完成したら、これまでのプロセスをまとめて、今後の新たな拠点づくりに活かします。

「成果のまとめ」

進めた取り組みはまとめることで、振り返ったり、ほかの人と共有することができます。今後に向けた新しい取り組みの参考にもなります。

1
はじめに

2
加美町の
景観の見どころ

3
加美町の未来
を想像しよう

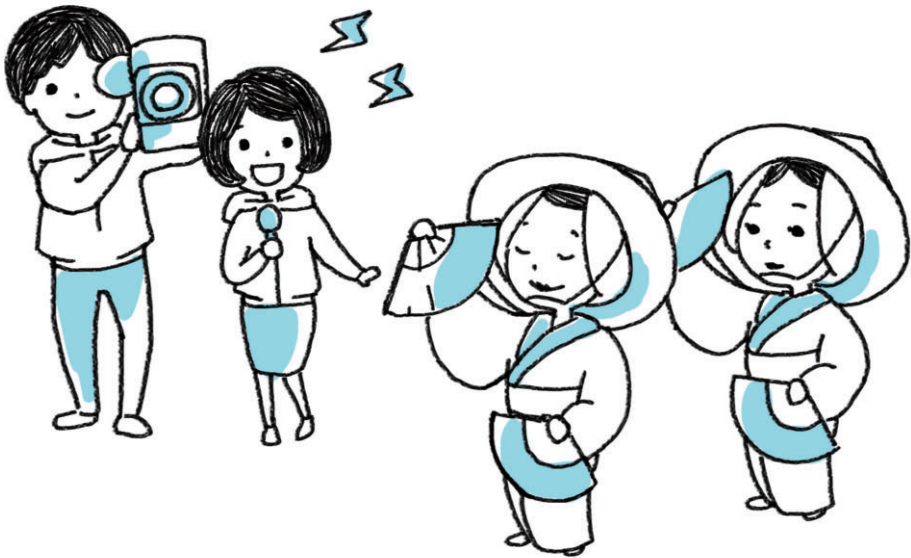
4
加美町の未来像
をつくろう

5
取り組みを
はじめよう

6
おわりに

シナリオ
03

まちなりわい発信局



加美町の魅力を、なりわいを支えている住民を紹介しながら町内外へ発信します。この取り組みでは、小野田の農家を中心に農業カレンダーを作成するほか、若者によるテレビやインターネットも活用して加美町の魅力を発信していきます。



萌芽期

加美町農業カレンダーづくり

まず、地域住民や農家で「なりわい発信局」を組織します。「なりわい発信局」は、カレンダーに掲載する農家を探し、取材を行います。取材した内容をもとにカレンダーを編集・作成し、町内に発行します。



「カレンダーへの工夫」

加美町の農家は一年を通してさまざまな野菜を育てています。カレンダーに、季節ごとに採れる野菜に関する豆知識や、旬の野菜を使ったおいしい献立を載せるのもいいでしょう。



成長期

インターネットを活用した情報発信

小学校や中学校、高校と連携して取材活動を行います。児童や生徒が農家を取材し、「なりわい発信局」がその情報を整理します。インターネットを活用して町外へも毎週情報を公開していきます。



円熟期

体験番組づくりと発信

番組では、加美町の農地で農作物を栽培する過程等を紹介していきます。協力してくれる農家の他に、出演者としてイケメンやイケジョを募集します。出演者は番組の中で農作業を体験します。

撮影した番組は週一ぐらいの頻度で、テレビやインターネットを通じて放送します。小野田の田植踊りなど、地域の文化も合わせて紹介することで、加美町の魅力を発信していきます。

1

はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
04

加工体験を通した食育のすすめ



加美町の子どもたちは、町内の食や農と触れ合い、学ぶ機会が少ないという課題があります。この取り組みでは、農家や学校の方々と協力して、子どもたちを中心に食と農を楽しく学べるような場をつくります。そして、加美町の食を後世に伝え、さらに町外へも発信していく仕組みづくりを行います。

体験プログラムの充実と情報発信



萌芽期

「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」が農業体験などの受け入れを行っています。現在の体験プログラムを、町内の子どもも気軽に体験できるよう、メニューと受け入れ農家の充実を図ります。体験プログラムの情報はチラシやインターネットを通じて発信します。

「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」

町をもっと元気にしよう！と平成8年に旧小野田町で設立したのがはじまりです。地域の資源を活用した農業・農村体験の受け入れやイベントの開催で、農家や地域に活力を生み出しています。

食を知るためのきっかけづくり



成長期

「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」が受付窓口となり、農家が体験受け入れを行っています。100円でできるバター作りなど、子どもでも気軽に体験できるプログラムにすることで、加美町の食に興味を持てるようなきっかけをつくります。

食育の定着



円熟期

加美町の食文化を受け継いできた大人と、食に関心を持ち始めた子どもたちが参加する料理教室などを開催して、子どもたちが食に対して更に理解を深めるとともに、多世代の交流を図ります。

また、農協や各種団体、学校の連携により、加美町産の食材と食文化を活かした弁当を開発し、販売します。

「地産地消」

地域で生産されたものをその地域で消費することを行います。加美町の学校給食では既に取り組まれています。子どもたちが日々勉強している学校で、地域の食を体感できるということは素晴らしいことです。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつかのもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
05

里山暮らしPR委員会



豊かな里山の資源を有効に活用できていない状況にあります。この取り組みでは、宮崎の里山暮らしの魅力を都会からリターンした人を中心に発掘し、情報発信をしながら地域にお客さんを呼び込み、食の提供や体験の受け入れなどを行っていきます。

里山暮らしPR委員会の発足



萌芽期

里山暮らしの魅力を伝える組織「里山暮らしPR委員会」を立ち上げるため、賛同者を募集します。Uターン者にも加わってもらうことで、新しい地域の魅力の発見に繋がります。まちづくりセンターを拠点に、発足した委員会の役割や活動内容について検討します。

「Uターン」

一度都市に移り住んだ人が再び生まれ育った地域に戻って暮らすことをいいます。一度外に出たからこそ、見えてくる地域の魅力があります。

「まちづくりセンター」

商店街の中心にある「まちづくりセンター」を、まちづくりのさまざまな情報発信や活動の拠点として活用していきましょう！町外の人でも気軽に訪れるような工夫があるといいでしょう。

PR情報の発信



成長期

里山暮らしの魅力の発掘と、それを体験できるプログラムやサービスなどについて検討します。商店街にぎわいづくり委員会で作成した「みやざき物語」も活用していきます。また、プログラムに協力してくれる農家を見つけ、受け入れ体制を作ります。情報発信にはインターネットなどを活用していきます。

里山暮らしの体験



円熟期

まちづくりセンターを拠点として、「切込焼 × 食」や「自然 × 食」などをテーマにした食事の提供や体験の受け入れを行います。里山暮らしのファンが定着してきたら、地域にある空き家・空き店舗も活用して、広く体験プログラムなどを実施していきます。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見直し

3 加美町の未来
を想像しよう

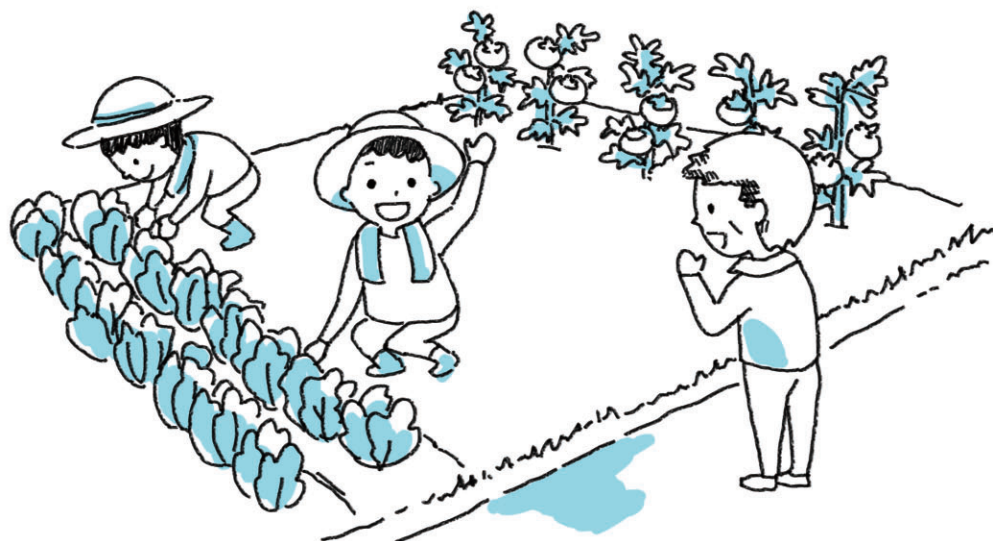
4 加美町の未来像
いくつかのもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
06

市民農園による宮崎のファンづくり



町内には活用されなくなった農地が増えつつあります。一方で、都市部の住民の中には、農村での農業体験などに興味を持つ人が増えています。この取り組みでは、宮崎の遊休農地を市民農園として有効活用を図りながら都市部のファンづくりを行います。



萌芽期

市民農園の確保

地元の有志で、農地の貸し出しや農作業の指導・管理ができる農家を募集し、市民農園の管理・運営組織を発足します。そして、市民農園として貸し出しできる農地をリスト化します。また、管理・運営組織で市民農園における利用者への指導方法や管理方法、料金、利用者のルールなどについて話し合います。

「市民農園」

一般に、サラリーマン家庭や都市住民のレクリエーションとしての自家用野菜・花の栽培、また、高齢者の生きがいづくり、児童・生徒の体験学習など多様な目的で、小規模の農地を利用した野菜や花を育てるための農園のことをいいます。



成長期

市民農園の実施

シナリオ 04 の「加美町グリーン・ツーリズム推進会議」や、シナリオ 05 の「里山暮らしPR委員会」と連携し、市民農園の利用者を募集します。利用者の希望に応じて作物の種類や作業の内容は異なりますが、農家と利用者の交流が積極的に図れるようにします。



円熟期

交流の拡大

農家と利用者の付き合いが長くなってきたら、農業体験だけでなく、農家において加工体験や生活体験ができるようにします。また、利用者が知人を連れて来て作業をしたり、新規利用者に指導するなど、利用者同士の交流も図るようにしていきます。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつかのもの

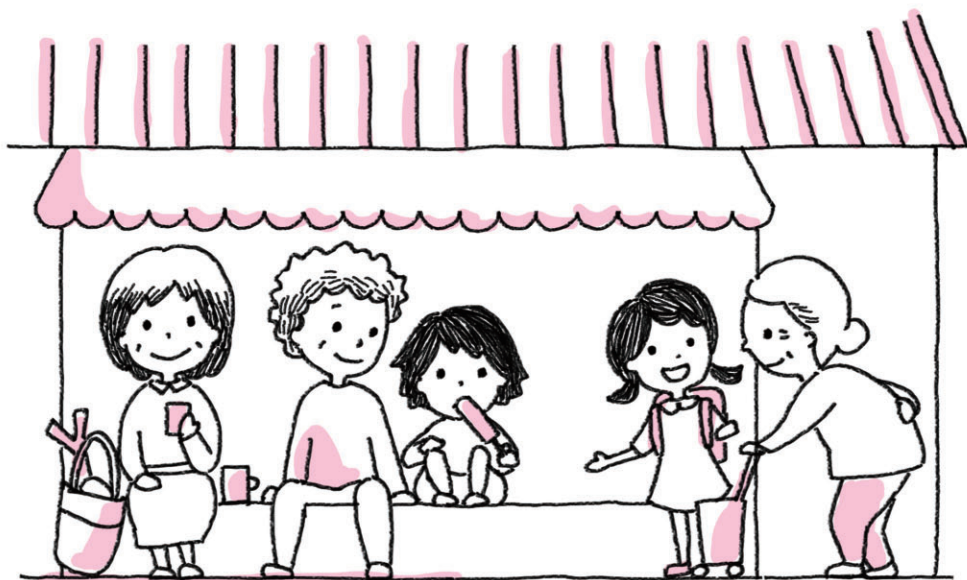
5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

暮らし

- ・ 外出を促す休憩処づくり
- ・ 蔵を拠点とした食文化の伝承
- ・ まちの名人発掘
- ・ 多世代が集う伝承の場づくり
- ・ ペットとともに訪れるまちへ
- ・ 地域を巡るにぎわいづくり
- ・ 宮崎文化祭
- ・ 空き家を活用した芸術家の拠点づくり
- ・ 子育て世代の環境づくり

外出を促す休憩処づくり



住民がまちに出てお茶や会話を楽しむ機会が少なくなっています。その原因としてまちに気軽に集まれる場所が少ないことがあげられます。この取り組みでは、中新田の高齢者の方々が普段利用する場所に、住民が集える休憩処を整備することで、高齢者の方々の外出を促します。

候補地の選定



萌芽期

高齢者が外出するきっかけとなる病院や店舗、公共施設が集中する中新田商店街の中で、休憩処の候補となる空き家や空き店舗などをリスト化します。町は、空き家や空き店舗のリストの中から候補地を選定します。

★アイデアの発端

バス停での待ち時間や、病院での待ち時間を有意義なものにしたいという意見から発展しました。

休憩処の整備



成長期

町は、休憩処を管理・運営する組織を発足、または既存の組織に委託するなど体制づくりを行います。候補地の所有者から建物を賃借し、必要な改修を行います。また、町と管理・運営組織は、休憩処の利用について広報紙などを通じて情報発信していきます。

世代間交流



円熟期

管理・運営組織が休憩処を運営します。休憩処は、病院や買い物帰りの高齢者だけでなく、周辺住民も気軽に利用でき、お茶や会話を楽しみながら過ごせるようにします。また、学校帰りの子どもが立ち寄り、高齢者と交流できる機会をつくります。高齢者が持つ知恵や技を子どもたちに教えるイベントや、子どもたちの作品展示などを行います。

蔵を拠点とした食文化の伝承



地域の食文化を通じた住民同士の交流が求められています。この取り組みでは、地域でつくられた食材や各家庭に伝承された食文化を活用し、地域内外の子どもから高齢者まで楽しめる場所とイベントを開催することで、「食文化の伝承」と「食文化の創造」で世代間の交流をつくります。

拠点の整備



萌芽期

地域住民と商店主などで構成するシナリオ 01、02 の住民組織などが、中新田商店街の建物利用の実態調査を行い、拠点の選定を行います。現在使われていない蔵などの建物を所有しており、活用したい人がいれば、その場所も拠点の候補とします。そして、料理が得意な住民や料理店なども加えた運営組織を発足します。運営組織は拠点となる建物の改修を行います。



成長期

拠点の運営

運営組織は、拠点で料理を提供しながら食文化を地域内外に発信してきます。地元料理の展示やレシピの配布を行うとともに、食材や加工食品の販売なども行います。また、町内のイベント時や観光施設でも販売を行います。



円熟期

食文化発信のイベント開催

冬に開催されている「うめえがすと鍋まつり」に加え、町内の各種団体等にも参加を求めて「カレーまつり」を開催します。このイベントでは地域の食材を利用したカレーを振舞います。国民食となっているカレーを提供することで、子どもから高齢者まで楽しめるイベントとします。

「料理の工夫」

四季を通して、それぞれの季節の食材を使った料理を提供するイベントを開催してもいいでしょう。また、中新田には酒蔵が点在しています。日本酒に合った料理の提供やレシピを作成するのもいいでしょう。

まちの名人発掘



加美町には多くの伝統的な技術を持った方がいます。しかし、それらの技術に触れる機会が少ないために、若い世代に伝承されずに埋もれてしまうことが心配されます。この取り組みでは、中新田の住民が先生となり、若い世代へ地域に伝わる技術や文化を伝承する活動を行います。



萌芽期

まちの名人の発掘

町は、この取り組みの趣旨に賛同する住民を募集し、「まちの“技”伝承委員会」を発足をします。委員会は、住民から得意な技を持っている方を自薦・他薦を問わず募集します。また、シルバー人材センターやボランティア団体にも情報提供を依頼します。そして、応募や情報提供のあった中から「まちの名人」を選考します。

「誰でも名人」

誰でも特技を持っているはずです。歴史に詳しい人、釣りが得意な人、昔の遊びが得意な人…など、身の回りにいる名人を発掘しましょう。



成長期

運営体制づくり

まちの名人を選考したらまちの名人リストを作成し、冊子としてまとめます。まちの名人リストは定期的に更新していきます。委員会は、名人の紹介や受付窓口、連絡調整など運営体制を整えます。活動拠点は公民館とします。



円熟期

地域における活動

委員会は、小・中学校、高校と連携して授業や行事に「まちの名人」を派遣する他、イベントやお祭りで名人による発表の場を設けることで、地域に伝わる伝統文化を継承させていきます。

「夏休みでの企画」

夏休みに児童や生徒が、興味のあるまちの名人の家を回り、名人と一緒にさまざまな体験をするといった企画も考えられます。

1

はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6

おわりに

シナリオ
10

多世代が集う伝承の場づくり



地域では、住民たちが気軽に集まることができる場所が少ないことや、それによる世代間交流の機会が減少しているという課題があります。この取り組みでは、誰もが自由に利用できる場所をつくとともに、イベントの開催などで様々な世代をつなぐ拠点をつくります。

多世代が集う場の検討



萌芽期

各行政区で、地域の集会施設である集会所の活用について、集落内の多世代が集うためにはどうするか？などを話し合います。住民が自由に利用できる日や時間帯、管理体制だけでなく、多世代が集うイベントの内容や担当者についても検討します。



多世代が集う場づくり



成長期

地域の多世代が集うために改修が必要な場合は工事を行います。行政区は、集会所を自由に利用できる日やイベントの開催情報などについて、住民に向けて定期的に情報発信します。



多世代が集うイベントの開催



円熟期

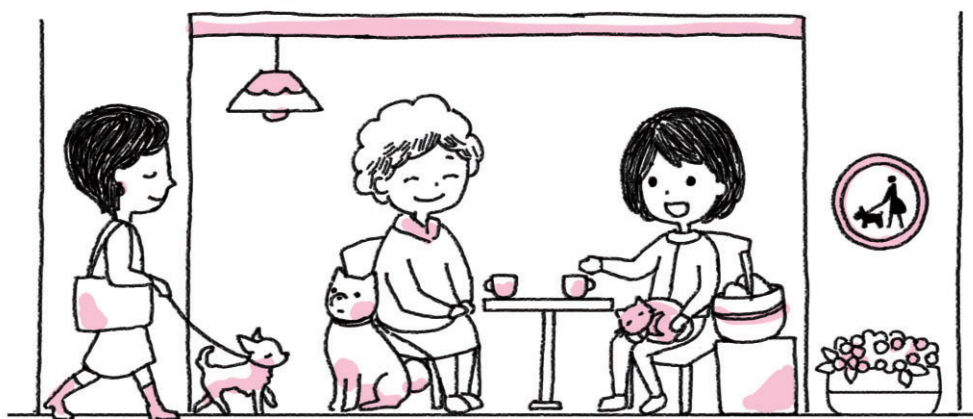
集会所では、季節ごとに地域で生産された旬の野菜などの販売やおいしい食べ方の紹介、地域に伝わる伝統文化の披露など様々なイベントを開催します。この機会を通して、親子連れから高齢者まで、幅広い世代を巻き込んだ伝承の場にします。

「できる規模から始める」

集会所や公民館を使って、まずは誰でも気軽に立ち寄れるような小規模なイベントを開催するといでしょう。賛同者が集まれば、複数の行政区で連携して大きな規模で実施することもできるでしょう。

シナリオ
11

ペットとともに訪れるまちへ



ペットを飼っている家庭はたくさんあります。その中には、旅行などにペットを連れていけないという悩みを抱えている家庭もあります。この取り組みでは、小野田の飲食店や旅館などにペットを連れ込むことができる体制をつくり、ペットとともに訪れることができるようにします。



萌芽期

ペットについて理解を深める

地域の飲食店や旅館の経営者、また、ペットを飼っている人を対象に、ペットとの付き合い方に関する研修会を開催します。経営者にはしつけをされているペットの安全性について、飼い主にはしつけの必要性について理解を求めます。

★アイデアの発端

ペットと泊まれるホテルや入れるお店があれば、「旅行に行きたいけれども、ペットを受け入れてくれる場所がないから行けない…」と悩んでいる家族を呼び込むことができ、観光客が増えることも期待できるかも？



成長期

ペットを受け入れる体制づくり

地域の飲食店や旅館において、ペット受け入れ可能な店で組織を発足します。受け入れ可能店は登録制とし、ペット受け入れ店のマップを作成します。また、ペット入店に関するルールも作ります。



円熟期

ペット連れのお客さんの受け入れ

ペット受け入れ可能店では、ペット連れのお客さんを受け入れます。また、張り紙などで公園といった公共の場でのマナーについて徹底してもらいます。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

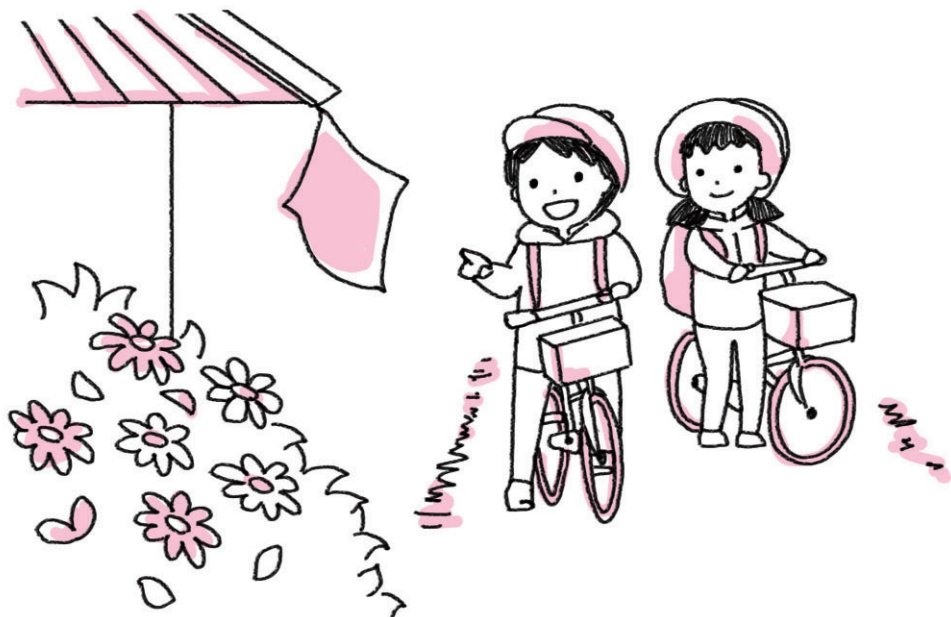
4 加美町の未来像
いくつかのもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
12

地域を巡るにぎわいづくり



この取り組みでは、宮崎の民家の手入れされた庭を眺めたり、気軽に立ち寄れる仕組みをつくります。自然に囲まれたまちの中を巡り、住民同士や町外からの来訪者も含めた交流の創出を図ります。おもてなしの心で宮崎の人情を発信し、人々が集うにぎわいをつくります。



萌芽期

民家開放の仕組みと体制づくり

地域からプロジェクトの趣旨に賛同する人を募集し、「黄色いハンカチプロジェクト実行委員会」を発足します。委員会では、民家の軒先に開放の目印として黄色いハンカチを付けることや、開放する空間、時間帯、来訪者への対応などの仕組みについて検討します。また、各家庭の庭の手入れなどのほかに、ワークショップを開催して各家庭オリジナルの案内看板づくりを行います。さらに、開放する民家やおすすめのまちあるきコースをまとめたマップを作成します。

「民家開放」

自慢の庭だけでなく、家に代々伝わる珍しいものを見せるのもユニークで良いでしょう。来訪者とお茶を飲んで会話を楽しむこともできます。それぞれが出来る範囲で楽しめるような内容にします。

「わかりやすいマップ」

マップを作る際に、まちづくりセンターや公共施設、集会所など、目印となるような建物を載せて、巡る人がわかりやすいものにします。



成長期

情報の発信とイベントの開催

委員会はチラシやマップの配布、インターネットを活用した情報発信を行っていきます。また、お試しツアーやオープンガーデンなどを開催して来訪者の増加を図ります。



円熟期

まちの顔づくりの検討

来訪者がまちの中を回れるように、まちづくりセンターを拠点として自転車のレンタルサービスなどを実施します。「黄色いハンカチプロジェクト」を通して、人々の交流が生まれ、まちを巡る動きが見えるようになったら、まちの顔となるようなランドマークの整備について検討します。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見直し

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

宮崎文化祭



地域には様々な人が住んでおり、人材の宝庫と言えます。この取り組みでは、宮崎で一人ひとりの趣味や特技を活かした勉強会や講座を開催し、他の人と共有し合うことで、暮らしていくうえでの生きがいと楽しみを広げていきます。地域の隠れたユニークな人材を発掘するとともに、誰もが気軽に学び遊べる環境を整えます。

人材の発掘



萌芽期

シナリオ 09 と同様に、町はこの取り組みの趣旨に賛同する住民を集めて委員会を発足します。

委員会は、農業、音楽、芸術、料理、歴史などジャンルを問わず、自分の趣味や特技を活かしたい方を募集します。その際、文化協会や体育協会、各団体にも情報提供を依頼します。委員会は応募や情報提供のあった人を人材バンクへ登録します。



成長期

講座・イベントなどの開催

委員会は、人材バンクに登録された人が講師となる「学び遊べる講座」を企画します。また、イベントと連携した発表会の開催についても検討します。受講生は、チラシやインターネットなどで募集し、講座の最後に修了証や認定証を渡され、その分野の経験者として認められます。

「開催場所の工夫」

まちづくりセンターや公民館、スポーツ公園などの公共施設を講座の会場として利用できるでしょう。また、公共施設に限らず、空き家を活用するなど、おもしろい場所を発見していくのも良いでしょう。



円熟期

宮崎文化祭の開催

日々の成果や発表の場として宮崎文化祭を開催します。文化祭では、宮崎の風土を活かした「土手川のライトアップ」や「自然の中での音楽会」を行い、みんなで楽しみの場をつくりまします。小学校では子どもたちへ向けて「語り部会」が開かれます。

「語り部会」

高齢者や地域に詳しい人が幼稚園や小中学校へ行き、昔の生活の様子や民話を子どもたちに話します。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見直し

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
14

空き家を活用した芸術家の拠点づくり



地域には空き家が増え続けている状況にあります。町では空き家を有効活用して定住促進を図るため、空き家バンクを開設しています。この取り組みでは、宮崎に存在する空き家を活用して移住者を増やしたり、芸術家の拠点づくりを行います。

空き家バンク情報の充実化



萌芽期

町では空き家バンクを開設していますが、利用者のニーズに合った物件を確保するために、空き家調査や空き家所有者へ登録の依頼をするなど、登録物件の充実化を図ります。また、町外の人が空き家に移り住んでも仕事や子育て、医療、地域コミュニティなどの面で不安がないように、町は関連する施策と連携する体制づくりを行います。

「空き家バンク」

町の「空き家バンク」には所在地や構造などの基礎情報や、外観の写真や間取図などがカルテとして掲載されています。町のホームページから見ることができます。



成長期

情報の発信と体験の実施

空き家物件の詳細な情報を発信します。その際、公共施設や商店街、病院などへの距離や公共交通機関など、移住希望者に必要と思われる生活情報も掲載します。また、田舎暮らし体験ツアーや空き家物件への体験入居なども実施することで、移住希望者が移住後の生活をイメージできるようにします。



円熟期

芸術家の拠点づくり

移住者が空き家に住み始めたら、移住者と地域住民との交流の場を設けることで、移住者が地域に溶け込めるように支援をします。また、宮崎は陶芸の里であり、自然に囲まれた豊かな環境にあることから、空き家を芸術家の活動拠点としても活用します。

「芸術家の活動拠点」

移住した芸術家の作品を展示したり、子どもたちと一緒に作品をつくったりする場があるといいかもしれません。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

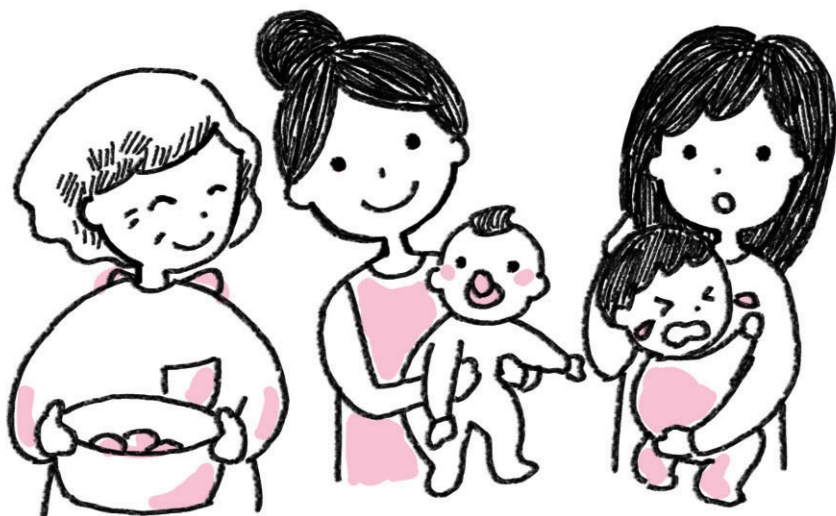
4 いくつもの
加美町の未来像

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

シナリオ
15

子育て世代の環境づくり



子育て世代の人たちの中には、出産を機に会社を辞め、出産後の雇用の場を求めている人もいます。また、子育て世代同士のつながりを求めています。この取り組みでは、宮崎で保存継承されている食文化を子育て世代が受け継ぎ、観光客向けに料理を提供する活動を通じて、雇用の場と子育て世代のつながりをつくります。



萌芽期

コミュニティサロンの整備

子育て世代の中で、雇用の方や人との交流を求めている親を募集します。現在、宮崎商店街にはもち茶屋があるので、その運営に参加できる体制づくりを行います。また、親が働いている間、子どもを預けたり、親同士が気軽に交流できる場を、まちづくりセンター近くの空き家などを整備して「コミュニティサロン」として活用します。

「コミュニティサロン」

町内会等の地域社会の活性化を図るため、空き家等を活用して地域住民同士の交流や地域づくりを推進するための場をいいます。このシナリオは、子育て世代に着目したコミュニティサロンを検討します。



成長期

食文化の提供とコミュニティサロンの運営

まちづくりセンター内で、子育て世代による餅料理の提供や物産販売を行い、食文化を通じて交流します。コミュニティサロンは子育て世代が管理・運営を行い、働いている親の子どもを預かります。親は交代で料理を作ったり、子どもたちの面倒を見ようにします。また、子育ての先輩の方々にも協力をもらいます。



円熟期

交流の場づくり

コミュニティサロンでは、日時を決めて親と子ども全員で交流する場を設けます。また、地域の食文化を継承してきた子育ての先輩の方々との交流の場も設け、子育てに関する相談もできるようにします。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見直し

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつかのもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

自然

- ・ 自然とのふれあいづくり
- ・ 日曜しぜん探検隊
- ・ 四季を体験する自然学校

1
はじめに

2
加美町の
景観の見どころ

3
加美町の未来
を想像しよう

4
加美町の未来像
いくつかのもの

5
取り組みを
はじめよう

6
おわりに

シナリオ
16

自然とのふれあいあいづくり



中新田

自然からは多くのことを学べますが、生活環境の変化に伴って自然との関わりが減ったため、川や山などは荒れてしまい、自然とのふれあいは少なくなっています。この取り組みでは、身近な自然と関わる機会を創出しながら、自然の中で学べる環境づくりを行い、自然教育を実施します。

自然とのふれあいイベント開催



萌芽期

町は、身近にある自然とふれあうことで親しみとその魅力を感じてもらうため、町の川魚を捕まえて食べてみる「おさかなの日」や、田んぼの中で泥だらけになって遊ぶ「みんなで泥まみれの日」といったイベントを企画します。企画するにあたっては、漁協や農協、行政区などの協力を求めます。参加者は、チラシやインターネットを通じて募集します。



自然教育の体制づくり



成長期

気軽に自然とふれあえる場所を整備します。あゆの里公園ややすらぎの森を活用したり、休耕地の田んぼや畑を誰でも遊び場として利用できるようにします。また、子どもたちに自然の豊かさや仕組みを体験しながら、自然との共生、環境問題などについて学んでもらうことを目的に、自然教育のプログラムを検討します。



「プログラムの検討」

プログラムを考えるときには、どこで、誰が講師となり、どんな内容を提供できるかを考えます。森林インストラクターや農協、水辺環境に詳しい団体など多様な団体と連携することが望ましいです。

自然教育の実施



円熟期

町は、検討した自然教育プログラムを冊子としてまとめます。また、自然とふれあう場所についても、地域の自然情報として地図にプロットし、プログラムと一緒にまとめます。冊子は小中学校に配布して、積極的に実施してもらいます。

シナリオ
17

日曜しぜん探検隊



昔は山や川で遊ぶ風景が日常でしたが、今は自然の中で遊ぶ子どもたちの姿をほとんど見なくなりました。この取り組みでは、自然の中で遊ぶ楽しさ・大切さを保護者に知ってもらい、子どもたちに自然を舞台にした遊びを体験させます。そして、子ども主体のクラブを発足し、自然遊びや知恵を子どもたちで伝え合う環境づくりを目指します。

自然を知るセミナーの開催



萌芽期

町は、小学校のPTAや子ども会育成会を対象に、自然の中で遊ぶ楽しさや大切さ、また危険な場所や行為などを正しく認識してもらうセミナーを実施します。講師として、行政区やコミュニティ推進協議会、老人クラブなどから自然遊びに詳しい人などを招きます。



自然遊びの実施



成長期

各小学校のPTA・子ども会育成会は、子どもたちを対象に、自然を舞台にした遊びや手作りの道具を使った遊びなどを企画します。はじめは集会所の敷地や学校の校庭など、野外でできるものからスタートし、徐々に自然の中へと舞台を移して行きます。



「手作りの道具」

風揚げや竹スキー・ソリといった手作りの道具を使った遊びについては、地域のお年寄りなどを先生として迎えるといいでしょう。

子ども主体のクラブによる活動



円熟期

外で遊ぶ子どもたちを見かけるようになったら「日曜しぜん探検隊」を発足します。メンバーは、自然の中での遊びや自分たちが作った道具で遊ぶ楽しさを実感して成長した中高生とします。今度は自分たちが教える立場として、地域の小学生を対象にイベントを企画します。地域の大人たちは、必要に応じてアドバイスやサポートをします。

シナリオ
18

四季を体験する自然学校



豊かな自然に恵まれた加美町の子どもたちは、昔から自然の中で遊ぶことが当たり前でした。しかし、近年では室内での遊びが増え、川や山などで遊ぶ機会がなくなっていました。この取り組みでは、町の子どもたちに自然の魅力を体験する機会を与えとともに、町外からも参加者を募り、加美町の自然のよさを発信していきます。



萌芽期

人材の発掘

町は、取り組みの趣旨に賛同する住民を募集し、公民館を活動拠点として「かみ四季自然学校」を組織します。自然の中での遊びに詳しい人や知恵・技を持った人、自然の魅力を教えたい人などを募集し、人材リストをつくります。その際、シナリオ 05 の「里山暮らしPR委員会」や老人クラブといった各団体にも協力を求めます。



成長期

自然体験活動の実施

人材リストに登録されている人を交えながら、川遊び教室や雪山遊び、虫捕り、山菜採り大会や四季キャンプ体験といった、「四季を通して自然の魅力を体験できる」プログラムを企画します。プログラムは親子でも楽しめるものにします。参加者は、小中学校、子ども会育成会と連携しながら募ります。



円熟期

町外へのPR活動

住民を対象にしたプログラムを継続させながら、町外・都市部の子どもたちを対象としたプログラムも企画し、参加者を募集します。町外の方々に参加してもらうことで、加美町の自然の魅力を知ってもらい、豊かな自然を発信していきます。

1

はじめに

2

加美町の
景観の見どころ

3

加美町の未来
を想像しよう

4

加美町の未来像
いくつかのもの

5

取り組みを
はじめよう

6

おわりに

担い手

- ・ 高校生が集うお店作り
- ・ 学生発のユニークなPR活動
- ・ 人や資源が循環する「贈り物トラック」
- ・ 学生を呼び込む田舎暮らし体験

シナリオ
19

高校生が集うお店づくり



地域には若者が気軽に集える場が少ない状況にあります。この取り組みでは、中新田の商店街を中心に高校生自らが企画・運営に関わり、若者の拠点となる場所づくりを行います。



萌芽期

学生のニーズの把握

高校生が集う拠点となるようなお店づくりに向けて、ニーズを把握します。中新田高校の協力を得て、全生徒にアンケート調査を行います。学生が集まる拠点の必要性や場所、利用時間帯、拠点での活動内容などについて意見を伺います。



成長期

拠点の整備

アンケート調査で拠点を必要と回答した高校生を中心に、拠点の運営プランづくりを行います。ロングホームルームや放課後の時間を利用し、拠点の場所やデザイン、運営方法などについて検討します。また、シナリオ 02 やシナリオ 08 に加わり、一部の時間帯を高校生が運営するといった連携も考えられます。



円熟期

拠点の運営

拠点の運営は、シナリオ 02 またはシナリオ 08 の組織に担ってもらいます。高校生は平日の放課後にアルバイトという形態で運営に関わります。また、高校生たちが集まることができるスペースも確保し、他の高校などにも情報発信して行きます。

1

はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつかのもの

5 取り組みを
はじめよう

6

おわりに

学生発のユニークなPR活動



まちの魅力を多くの人に知ってもらうため、若者による加美町の魅力の発掘・発信を行います。この取り組みでは、若者が読んで楽しめる広報紙や「かみ〜ご」の動画作成など、ユニークな方法を通して町内外に魅力を発信します。

広報部の設置



萌芽期

PR活動の中心となる団体を発足します。団体は、町内の中新田高校の協力を得て生徒の中から有志を募り、「加美町広報部」として設置します。広報部は、主に高校やシナリオ 19 の店を拠点として、取材や広報活動を行います。



活動内容の検討



成長期

加美町広報部としてどのような活動をしていくのか検討します。PRの手段として、広報紙の発行やインターネットの活用などが考えられます。また、発信する情報の内容も考えます。取材は誰が、いつ、どこで行うのか、取材した内容の編集は誰がするのかなど、役割分担についても検討する必要があります。



PR活動の実施



円熟期

活動内容が決まったら実行に移ります。町外への発信に向けてインターネットの動画サイトへ投稿したり、スーパーのレジ袋に広報紙を入れるなど、ユニークな方法を考えて、まちの魅力を発信します。また、他のシナリオにある「まちあるき」や「加工体験」などに参加して、その内容を伝えたり、シナリオ 03 の「まちのなりのわい発信局」との連携も考えられます。

人や資源が循環する「贈り物トラック」



加美町での生活には自家用車は必要不可欠であり、高齢者や高校生などは住民バスなどの公共交通を利用しなければなりません。この取り組みでは、小野田において、人が動くのではなく、地域の農林産物や加工品などが循環する「贈り物トラック」を運行させます。



萌芽期

組織の発足と運行内容の検討

贈り物トラックを運行する組織を発足します。さんちゃん会であれば、運営している「やくらい土産センター」に町内の農林産物や加工食品などが集まるため、スムーズな運行が期待できます。そして、トラックに積む商品の内容や運行ルートと販売場所、時間帯など運行に必要な事項について検討します。また、小野田の商店の商品なども扱うと商品の幅が広がります。



成長期

贈り物トラックの運行

トラックの運行日に、販売者は決められた時間まで商品を持ち込みます。トラックは公共施設や集会所などを巡回して販売します。贈り物トラックの運行は、事前に運行日時と販売場所、販売商品をチラシやインターネットなどで周知しておきます。農産物については、旬なものを取り扱います。



円熟期

トラック市の開催

贈り物トラックは、トラックに積んだまま販売できるので、駐車スペースさえ確保できれば様々なイベントに出張販売できます。また、たくさんの贈り物トラックが集まり、様々な商品を販売するトラック市も開催します。

「全国に広がる軽トラ市」

軽トラ市とは、軽トラックの荷台を店舗に見立てた朝市のことで、現在日本全国に広がっています。ネットショッピングなどで何でも手に入る時代ですが、対面販売というのが人気の理由のひとつになっています。

1

はじめに

2

加美町の
景観の見どころ

3

加美町の未来
を想像しよう

4

加美町の未来像
いくつもの

5

取り組みを
はじめよう

6

おわりに

学生を呼び込む田舎暮らし体験



まちの魅力を都市部の学生に体験してもらうことで理解していただき、その魅力を学生に発信していただきます。この取り組みでは、宮崎において農業体験等を研修内容としたインターンで学生を受け入れ、学生から地域の魅力情報を発信していただきます。

学生の募集とインターン



萌芽期

町は、地域づくりインターン事業として、「農業」、「里山」、「田舎」に興味を持つ都市部の学生を募集します。学生は、加美町に2～4週間滞在し農林業体験や陶芸体験をします。また、地域おこし協力隊とともに、産業やまちづくりなども体験します。最終日には、活動報告会で体験内容や感想などを発表します。

「地域づくりインターン」

都市部の学生たちと農山村の地域の人々をむすぶきっかけづくりになります。首都圏の学生が一定期間滞在し、地域住民や役場の人たちと一緒に地域づくり体験や交流プログラムに取り組むものです。

「地域おこし協力隊」

人口減少や高齢化が進む地方で、地域外の人材を積極的に受け入れ、地域協力活動を行ってもらいます。その人たちの定住・定着を図り、地域力の維持・強化を図っていくことを目的とした国の制度です。

リピーターづくり



成長期

インターン終了後は、学生に休み期間を利用して、農作業のお手伝いやイベントへ参加してもらいます。インターン中に時期的にできなかったことなども体験し、さらに地域の良さを知ってもらいます。

体験記の情報発信



円熟期

インターンを通じて宮崎の楽しいところや面白いところ、美しいところなど、学生が発見したことを「体験記」としてインターネットなどで情報発信してもらいます。シナリオ 05 の「里山暮らしPR委員会」と連携した活動も効果的です。

「インターネットを活用した情報発信」

学生がインターン中に撮影した加美町の風景を、ホームページや SNS など発信することで、新たに町に興味を持ってくれる人が現れるかもしれません！

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

未完成のシナリオたち

広がるアイディアの数々

ここでは、まだ具体的な取り組みの内容が決まっていない、「未完成のシナリオ」を紹介していきます。自分たちの地域でどういったまちづくりができるのかを考えるきっかけになればと思います。

また、未完成のシナリオに住民のみなさんのアイディアを加えながら形あるものにして、取り組みを考えてみましょう。

凡例

プロジェクト名

- ①主なプロジェクトの目的
- ②プロジェクトの概要

田川の保存プロジェクト

- ①蛍の舞う美しい川づくり
- ②田川を守る会を結成。河原の草刈りや清掃を通して流域全体で美しい田川を後世へ伝えていく。

鳴瀬川絶景ポイントづくり

- ①鳴瀬川沿いの景観整備
- ②まちあるきで鳴瀬川沿いの絶景ポイントやいいポイントを見つけて、人の集まれる場所としてつくりあげていく。

1 はじめに

2 加美町の
景観の見どころ

3 加美町の未来
を想像しよう

4 加美町の未来像
いくつもの

5 取り組みを
はじめよう

6 おわりに

まちのいいところ
写真展

- ①まちの魅力の発見と共有
- ②まちの好きな場所やものを撮った写真を集めて、展覧会を行う。それらの写真を映像にし、部屋に流しておく。写真展では気に入った写真に投票できるシステムにし、人気のあった写真を中新田でつくる日本酒のラベルとして使用する。

なかにいざいところ
発見ウォーキング

- ①まちの魅力の発見
- ②見慣れている風景でも、カメラを持って歩いてみると普段見過ごしている町の特徴を発見することができる。このまちあるきでは、住民がカメラを持って町を練り歩き、気に入った場所やものを写真に納めていく。写真は最終的に大きなマップに配置し、展示する。

口述史
カレンダー
づくり

- ①加美町の生活史を根付かせる
- ②口述史とイラストを記した日めくりカレンダーを作ること、生活の歴史を日常の中で振り返り、伝える仕掛けを作る。制作過程からまち全体を巻き込んでいく。

鳴瀬川の足跡を
辿るウォーキング

- ①鳴瀬川の散策を通じたまちの構造の把握
- ②現在の鳴瀬川の流域、水路、かつての水路跡を辿り、鳴瀬川とまちの関係について理解を深める。

川の遊び場づくり
プロジェクト

- ①水を中心とした景観整備と遊び場づくり
- ②地域の生活から遠ざかってしまった川・水路を含むまちなかの水辺空間を、憩いの場や見て楽しめる場として再整備していく。

ツール・ド・
加美町

- ①美しい風景のアピール
- ②「やくらい薬師の湯」をゴールとし、自転車で回るコースを設定。美しい風景を資源に来訪者増加につなげる。

世間遺産発掘
プロジェクト

- ①後世に残したい景観の共有・保存
- ②「世間遺産登録機関」を立ち上げ史跡や建物、居久根などを加美町の宝として世間遺産に登録し、周知することで、後世につないでいく。

柳の道
再生プロジェクト

- ①植樹によるランドマークの創出
- ②かつては中新田に柳の並木道があったが、車の通行の邪魔になると撤去されてしまった。人々の記憶に残る柳の並木を水路沿いに再生し、歩いて楽しい通りにしていく。

子供とふれあう
股川通り

- ①子どものための水辺空間の創出
- ②中新田小学校沿いに流れる水路の一部をつくり変え、水とふれあうことのできる空間にしていく。小学生や地域住民が協力し、水路の清掃や管理を行う。

かかしコンクール
プロジェクト

- ①田園風景を飾る
- ②かかしコンクールを行い、子どもから大人まで、各々がつくったかかしで加美町の田園風景を彩る。

1
はじめに

2
加美町の
景観の見どころ

3
加美町の未来
を想像しよう

4
加美町の未来像
いくつかのもの

5
取り組みを
はじめよう

6
おわりに

**田んぼオーケストラ
プロジェクト**

- ①田園風景を飾る
- ②美しい田園風景の中で、オーケストラの演奏を行う。田んぼの中のコンサートとして、新たな演奏空間を創出していく。

**かみべん
プロジェクト**

- ①名産品を用いた弁当の販売
- ②各地区の食文化を反映した弁当の販売を通じて、加美町各地域の魅力を伝える。

**合同まちあるき
の開催**

- ①地域内外の景観を知る
- ②あらゆる世代、地域の人と一緒に歩く「まちあるき」を開催し、その地域のもつ資源や課題を様々な立場から発見する。

**蔵と町屋
見学会・WS**

- ①まちの景観資源を考える
- ②中新田に残る蔵や町屋の内部を住民が見学し、その構造や歴史について学ぶイベントを行う。見学会後は、蔵や町屋の保存を考えるWS（ワークショップ）を行い、未来の蔵や町屋のあり方を考える。

**新・中新田座
プロジェクト**

- ①地域のにぎわいの創出
- ②かつては中新田には、映画館が3ヶ所あり、にぎわう場として機能していた。商店街に映画を流す空間を設け、アートスペースとする。映画以外にも小学生の授業、展覧会、まちゼミ等に使い、地域の一つの拠点としていく。

まちの未来模型を
つくろう

- ①まちづくりのビジョンの共有・発信
- ②商店街のお店や人の模型を作り、まちの将来を考えるワークショップを開催する。未来模型づくりを継続しながらまちづくりを行うことで、住民内で将来ビジョンを共有し、地域全体でまちの未来を考えていく。

「加美美人」
プロジェクト

- ①女性を通した町の魅力の発信
- ②フリーペーパーを通して、まちに住まう女性たちを紹介する。また、加美町のお店や企業、イベントの盛り上げなどに協力してもらい、女性の力で加美町のアピール、地域の活性化を目指す。

小学生
副業まちづくり

- ①子どもを中心に将来のことを考える
- ②小学生一人ひとりにまちに関わる役割を与える。水路係、花の水やり係など場所に結びつく役割を与えることで、まちへの愛着を育むと共に、まちの環境改善につなげる。

商店街まちゼミ
プロジェクト

- ①商店街の活性化と人のつながりを構築
- ②地域住民が先生となり、その知識やノウハウ、技術を伝え合っていく「まちゼミ」を行う。地域のコミュニケーションの場、信頼関係を築く場、まちの魅力を伝え合う場として機能する。

まちゼミスクール
空き地の青空学校

- ①地域の歴史の共有とまちの活性化
- ②住民や商店主などが先生になって、小学生を対象に集会所や空き地を利用して授業を行う。まちの歴史や現状について知り、これからのまちづくりについて考える基礎をつくっていく。

1
はじめに

2
加美町の
景観の見どころ

3
加美町の未来
を想像しよう

4
加美町の未来像
いくつかのもの

5
取り組みを
はじめよう

6
おわりに

